

# 新出資料『玉てはこ物語』について

渡 辺 守 邦

## はじめに

古書目録に『玉てはこ物語』という写本が載った。<sup>注1</sup>新出資料ということで見開きの図版一葉を掲げるとともに解説は長文にわたる。それゆえこの図版と解説とからこの新出資料の素性がかなりの程度まではつきりする。どうやら中世の関東天台で法華経を講釈するにあたって譬喩として使われた説話の寄せ集めと思しく、『法華経直談鈔』あるいはその周辺の典籍を出自とする可能性が高い。以下、順を追って考察を加えてみることにしたい。

## 一 『玉てはこ物語』と『法華経鷲林拾葉鈔』

まず古書目録の解説（以下に《解説》と略称）を、いささか長文にわたることを恐れつつも全文を引用してみる。

五五 玉てはこ物語 江戸期写 新出資料 一帙

一冊

縦一九・四糎、横一三・六糎、袋綴本。薄茶色表紙。表紙中央上部に、浅葱色金泥題簽で「玉てはこ」とある。表紙右上部に「東三三」と朱書した紙片を貼付しているが、摩耗が激しい。右下部及び左上部に「東卅四（三）（四）」をミセケチして右側に「三」と修

正」と墨書した紙片を貼付してある。本文料紙は楮紙。毎半葉八行、和歌は二字下げ二行書き。綴じ糸切れ、虫損が見られる。外題内題なし。一丁表に「和学講談所」の印記。題簽は後に貼付したものである。表紙見返に「たまてはこ」と墨書してあるのが透けて見えることから、元々は其紙表紙であったと思われる。二つの短い説話が章立てなしで連続しており、改行によって二つが分けられている。表題は二つめの説話の和歌に拠る。

一つめの話は、或る女房が「子を捨つる形見の卒塔婆いかりさらでは何とおやをたすけん」という和歌を書き付けた卒塔婆と共に子を捨てる。子は成長して学匠となり、母を求めて施行する。「たすけん」を「尋ねん」と書き換えたところ、再会し、親子共々往生した、というもの。『賢問子行状記』に同型の説話が載る。

二つめの話は、賀茂の神主と家の女房侍従の間に生まれた男子が、手箱の掛子に入れて捨てられる。その子は土御門大納言に拾われ、叡山で僧正となる。後に嵯峨の釈迦堂にて、手箱を機縁として両親と子が再会する、というもの。表題ともなった「玉手箱」の歌で締めくくられる。

実の親に捨てられた子が貴僧となり、捨てた際の形見を機縁として親子が再会する点が両話の共通点として挙げられるが、成立の経緯は不明であり、これまで知られていない新出の資料である。

猶、上段に収載の「あかはだか物語」も「和学講談所」の印記があり、紙質や題箋、法量もよく似ており、しかも同筆と見られるところから、この両者は同時期に、同じ人物によって書写されたものと思われる。

最終段落は同じ目録に「五四 あかはだか物語」として載る写本のことを述べるが、この物語については、後にも触れることになるはずである。

古書目録には『解説』に併せて見開き二ページ分の本文が図版（これも以下に『図版』と略称する）として掲出されている。その本文を翻字してみると次のようになる。

『玉ではこ物語』の素性の解明に役立つ手がかりを提供してくれているはずなので、慎重を期して行替えもそのままに翻刻してみた。

#### 〔第一ページ〕

- 1 をたて、此子はやくすつへししからす
- 2 はおやことまにころすへしとて

- 3 いかりたりちからをよはす此子を
- 4 すつるすいこ天皇の御時こかねに
- 5 てきくのもんをすへたるおんてはこ
- 6 を明神に御きしんあり此子をね
- 7 りぬきのきぬにつゝみかのはこの
- 8 かけこに入てかも川のへんにすてたり

〔第二ページ〕

- 1 ほうおうくはんねん八月のことなるに
- 2 つちみかとの大なこんといふ人かもの
- 3 明神につやしてあかつきかふあ
- 4 るにかわらにちいさきものゝなくこゑ
- 5 しければ人をつかはしてみせられ
- 6 けりかへりてしかゝと申たり此子
- 7 めしよせみつからふところにいれて
- 8 いへにかへりしかればさんもんにのほ

よんどころない事情で乳飲み子を捨てることになつて母親は、推古天皇ご寄進の手箱から懸子を抜き取り嬰兒を練絹に包んで入れて賀茂の河原に捨ててゐる。賀茂社に通夜した土御門大納言は下向の途次、赤子の泣声を聞きつけ懐に入れて屋形へもどつた、というあらずじのようである。これす

なわち《解説》にいう第二話、つまり、母親とは賀茂の神主の家女房侍従であり、懸子に入れて捨てられた子は土御門大納言に拾われたが、思いのほか賢かつたので叡山に登せて学問をさせたところ僧正となり、嵯峨清凉寺の釈迦堂において手箱を証拠に両親と再会する、という話なのであらう。

そうすると、この一話は『法華経鷲林拾葉鈔』に載る尊弁僧正の逸話と重なる。これも長文にわたるが全文を引用する。

一、物語云、賀武神主歎<sup>テ</sup>無<sup>レ</sup>子明神祈誓<sup>ス</sup>。女房達中侍従云女契<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>懷妊<sup>セ</sup>。亭主女房嘆<sup>レ</sup>之欲<sup>レ</sup>害<sup>ント</sup>。而推古天皇御宇以小金<sup>ニ</sup>菊重タル文打就タル御手箱神殿御寄進有ケリ。彼御手箱懸籠<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>之練貫絹引籠<sup>ニ</sup>、賀武河辺<sup>ニ</sup>捨玉ヘリ。宝応元年八月土御門大納言賀武宮通夜<sup>シテ</sup>曉下向玉フニ、河原少者泣声<sup>ニ</sup>シケリ。遣<sup>シテ</sup>御隨身<sup>ヲ</sup>令<sup>ニ</sup>見<sup>ユ</sup>之<sup>ヲ</sup>、返参<sup>リテ</sup>シカ<sup>ク</sup>ト申<sup>ス</sup>。サラハトテ召寄<sup>リ</sup>自御懷<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>家婦養<sup>リ</sup>育<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>、触<sup>テ</sup>事利根也ケレハ登<sup>セテ</sup>天台山<sup>ニ</sup>出家学文<sup>ス</sup>、無<sup>レ</sup>程貴僧成玉<sup>ニ</sup>ヒテ号<sup>ス</sup>尊弁僧正<sup>ト</sup>。三十三時於嵯峨釈迦堂<sup>ニ</sup>御説法有ケリ。

サテ彼侍従殿云女房捨<sup>レ</sup>子事悲頓出家比丘尼<sup>ニ</sup>成廻<sup>テ</sup>諸国<sup>ヲ</sup>詣<sup>テ</sup>靈仏靈社<sup>ニ</sup>、捨<sup>ニ</sup>シ子後世ヲモ訪我身<sup>ヲ</sup>二世安樂

ヲモ折玉ヒケルカ、三十三年ト云時及<sup>ニ</sup>老期<sup>ニ</sup>ケレハ、  
無<sup>ク</sup>レ何古郷恋サノ余<sup>リ</sup>二指<sup>シテ</sup>都<sup>ヲ</sup>上<sup>玉</sup>。嵯峨寺<sup>ニ</sup>コソ貴人<sup>キ</sup>說法有<sup>ル</sup>  
由ヲ申テ道俗群集<sup>シ</sup>參ケル程、我モ聽聞申サハヤト思テ  
嵯峨野ヲ透<sup>ル</sup>トテ、

待ケルヤ今コノ野ヘノ蓬生ニテツカラシケル野辺  
ノ道カナ

サテ御堂ニ參テ御說法聽聞玉ヒケルガ、殊勝中<sup>ノ</sup>  
申モ愚也。御說法終<sup>リ</sup>諸人皆歸ケレトモ此比丘尼一人僧  
正ニ尋申度事有トテ留<sup>リ</sup>ケリ。即御前ニ參テ、サテモ不  
審ノ事有トテ尋申、僧正何人御子、亦何処ヨリ出玉  
フ耶。僧正仰云、我無<sup>ハ</sup>父無<sup>レ</sup>母捨子ニテ有ケリト如上  
云云。彼尼重<sup>テ</sup>申云、加樣事末世御物語ニモ成事ニテ、  
哀其懸籠ヲ見參候<sup>ハ</sup>ヤト所望申間、聖人取出玉ヘリ。彼  
比丘尼何トシテカ其迄<sup>マデ</sup>ハ彼手箱ヲ持タリケン、取出<sup>テ</sup>合<sup>ニ</sup>  
彼懸籠<sup>ヲ</sup>テ見玉ヘハ少モチカハス。其時僧正ハ我子ニ  
テヲハシケリトテ名乗合玉ヘリ。真実父モ養父モ于今  
存生シケレハ彼僧正ト一所<sup>ニ</sup>寄合ケル。不思議事也。

玉手箱ナカニカケコノナカリセハフタミソロヘテ  
イカ、アフヘキ（『法華經鷲林拾葉鈔』卷二十三  
藥王本事品第三「燒身燒臂供養不同事」<sup>注2</sup>）

いま、翻刻にあたり句読点を私に補い、適宜改行した。以

下の引用も同様である。

法華經第二十三藥王品の「如子得母」（索引 七二d一  
<sup>注3</sup>六）の經義を譬喩により敷衍しようとして援用された例話  
である。土御門大納言、推古天皇ご寄進の手箱と懸子、賀  
武（賀茂）の河原と、登場人物も小道具も舞台も共通し、  
さらには「宝応元年」という偽年号までが重なり合う。お  
そらく『図版』から外れて翻刻が叶わなかった前後のペー  
ジも同様に大筋で一致し、『玉てはこ物語』のこの一話が  
叡山の尊弁僧正の逸話であつたという推測を支えるであろ  
う。なお余談ながら永井義憲氏は尊弁のこの一話を『法華  
經鷲林拾葉鈔』の著者天台僧尊舜が見聞した同時代の実話  
であろうとされる。<sup>注4</sup>

## 二『玉てはこ物語』と『法華經直談鈔』

これほどまでに細かな一致を見せるものの、『玉てはこ  
物語』第二話の出所を『法華經鷲林拾葉鈔』と結論づける  
のは慎重でなければならない。さらに詳しい重なりあいを見  
せる典籍が別に存在するところからである。さらに詳しく  
く重なりあうのは『法華經直談鈔』所収の以下の一話であ  
る。

物語云、昔賀茂神主歎<sup>ニ</sup>子無事<sup>ヲ</sup>。明神祈誓<sup>ス</sup>。或時召使女房達中侍從云女房契、無<sup>レ</sup>程懷妊<sup>シテ</sup>。男子一人産<sup>メリ</sup>。亭主女房大腹<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>、此子早可<sup>レ</sup>捨。不<sup>レ</sup>然者親子共可<sup>レ</sup>害<sup>レ</sup>之云。不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>力此子捨也。而推古天王御時金菊文スエタル御手箱明神御奇進。此子練貫絹褰彼手箱懸子入賀茂河辺捨。宝応元年八月事。土御門大納言云人賀茂明神通夜、曉下向有、河原少者鳴声、遣<sup>ハ</sup>人被<sup>レ</sup>見也。帰然然申<sup>リ</sup>。此子召寄自懷入家帰<sup>ル</sup>▲是養育<sup>セラル</sup>。利根事世勝。然登<sup>リ</sup>山門<sup>ニ</sup>出家<sup>サセラル</sup>。学文勝<sup>ル</sup>人、無<sup>レ</sup>程貴僧成、名尊弁僧正申也。卅三時於<sup>ニ</sup>嵯峨<sup>ニ</sup>積迦堂<sup>ニ</sup>說法<sup>シ</sup>。

諳彼母侍從公子捨<sup>テ</sup>事歎頓出家比丘尼成廻<sup>ニ</sup>諸国<sup>ヲ</sup>詣<sup>リ</sup>靈仏捨<sup>テ</sup>子後世訪<sup>リ</sup>又我身後生被<sup>レ</sup>祈<sup>ハ</sup>、卅三年云時早良老身成、無<sup>レ</sup>何古郷恋<sup>サニ</sup>指<sup>シテ</sup>都登<sup>ラ</sup>。処、折節嵯峨社貴人御說法<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>貴賤上下參見<sup>アルニ</sup>、サラハ參思<sup>モ</sup>、嵯峨被<sup>レ</sup>參<sup>リ</sup>。積迦堂參說法聽聞<sup>アルニ</sup>殊勝中々申愚也。又彼御僧ツクくト見<sup>ルニ</sup>、何哉覽我等古妻面影似<sup>カ</sup>。床敷、諸人皆下向有<sup>レトモ</sup>。此比丘尼一人僧正尋申度事有<sup>テ</sup>留<sup>テ</sup>、諸人帰畢後僧正前參被<sup>レ</sup>申様、聊爾<sup>ナレトモ</sup>不<sup>レ</sup>審存事有故尋申也。サテモ僧正御里何、又何人御子御座<sup>ニテ</sup>云云。僧正仰<sup>ニハ</sup>我無<sup>レ</sup>父母捨子也云如上件<sup>ト</sup>語<sup>ヲ</sup>。比丘尼是聞尚々不<sup>レ</sup>審思<sup>フ</sup>、哀々其手箱懸子御見有<sup>セ</sup>所望<sup>ト</sup>。僧正手箱懸子取寄彼比丘尼被<sup>レ</sup>見。比丘尼此懸子以急賀茂行、古我妻尋合<sup>テ</sup>此

由語。其時神主頓彼手箱取出<sup>シテ</sup>合<sup>シテ</sup>見<sup>ルニ</sup>不<sup>レ</sup>違。其時父母子共諸共我社<sup>ニ</sup>真実母父子<sup>ヲ</sup>名乗合<sup>タリ</sup>。其時歌、

玉手箱中懸子無カリセハ蓋実調<sup>フタミヘテ</sup>何合ヘキ<sup>カフ</sup>（『法華經直談鈔』卷九末、藥王本事品第十三「被捨子学匠成事」<sup>注5</sup>）。

同じく尊弁僧正の逸話であり、▼と▲とを使つて囲つた部分が『玉てはこ物語』からの翻刻にほぼ相当する。ここに姿を現わしたのは『玉てはこ物語』とより二つのそっくりさんである。この重なりあいがどの程度重なりまた相違するの、具体例を拾つてみよう。

『法華經鸞林拾葉鈔』と『法華經直談鈔』とはともに捨子尊弁僧正の母子再会譚を叙べることに於いて相違はないものの、表現の細部には若干の食い違いは存在する。例えば尊弁が捨てられたときの入れ物を『法華經鸞林拾葉鈔』が「懸籠<sup>ニテ</sup>入<sup>リ</sup>之練貫絹引<sup>ニテ</sup>箱<sup>ヲ</sup>」とし、『法華經直談鈔』は「練貫絹褰彼手箱懸子入<sup>ニテ</sup>」とする。練貫の絹で赤子の入った懸籠を包んだのか練貫の絹で包んだ赤子を懸籠に入れたのかとの違いである。この場面を『玉たはこ物語』は、

此子をねりぬきのきぬにつゝ、みかのはこのかけこに入てかも川のへんにすてたり

として文言を『法華經直談鈔』に一致させる。『法華經鷲林拾葉鈔』と『法華經直談鈔』との間に存在する他の小異に関して、その一つ一つの詳述を避けるが、同様であつて例外を見出さない。

頭から尻尾までと評しても許されるであろうこの一致は、それゆえ次のような事実をも浮かびあがらせる。『玉てはこ物語』は『図版』の最終行を、

いへにかへりしかればさんもんのにのほ

として表現がこなれない。この箇所に対応する『法華經直談鈔』の行文は次のごとくである。

家婦<sup>ニ</sup>是<sup>ハ</sup>養育<sup>ニ</sup> 利根<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>世勝<sup>ニ</sup> 然<sup>ハ</sup>登<sup>ニ</sup>山門<sup>ニ</sup> 出家<sup>ニ</sup> 学<sup>ニ</sup>  
文勝<sup>レ</sup>人、無<sup>レ</sup>程貴僧成、名尊弁僧正申也。

つまり『玉てはこ物語』最後の一行には意味の折れ曲った箇所が存在する。その箇所に、

いへにかへり※しかればさんもんのにのほ

と※印を付け、そこに『法華經直談鈔』から傍線を施した

文言を抜いて挿入するとき、

いへにかへり「是養育<sup>ニ</sup> 利根<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>世勝<sup>ニ</sup>」。しかればさんもんのにのほセテ

と文意が通じ、さらには後文にも、

是養育<sup>ニ</sup> 利根<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>世勝<sup>ニ</sup> しかればさんもんのにのほセテ  
(登<sup>ニ</sup>山門<sup>ニ</sup>) 出家<sup>ニ</sup> 学文勝<sup>ニ</sup>人……

と淀みなく続く。賀茂の河原で拾った子が思いのほかに聡明だったので教育を叡山に託したところ、はたせるかな学問が進み高僧となったというのである。『玉てはこ物語』の当該箇所が難解なのは、ページの変わり目という位置が障害となっていたのではなく、『法華經直談鈔』のワン・フレーズがすっぱり欠けていたことを原因とするものであり、両者の関係は、ことほど左様に逐語的な重なりを呈し、脱文の存在を立証するに足る緊密さを保つものであった。

『玉てはこ物語』は二話からなるが、そのうちの第二話「尊弁僧正母子一件の正体がほぼ明らかになった。残りの一つ、捨子に添えた卒塔婆が母子の再会をもたらすという第一話の方はいかがであろうか。こちらは、しかし、『図

版」の掲出もなく、頼りにできるのは、

或る女房が「子を捨つる形見の卒塔婆いかりさらでは何とおやをたすけん」という和歌を書き付けた卒塔婆と共に子を捨てる。子は成長して学匠となり、母を求めて施行する。「たすけん」を「尋ねん」と書き換えたところ、再会し、親子共々往生した、というものの。

という《解説》だけであって条件が整わない。

しかし、実はとんでもない着想がこの問題に新たな展開をもたらす。とんでもない着想とは、この一話もまた『法華經直談鈔』に類話を載せるところではないのかという臆測である。当るも八卦に類する無責任な推測であるが、この推測は間違っていないかったものようである。類話とは、都に住む貧女が老いた父親を養うために三歳になる子を捨てるといふ二十四孝さながらの感動的な一話である。

物語云、都<sup>ノ</sup>辺<sup>ニ</sup>ヤメメ女房一人<sup>アリ</sup>。七十成父<sup>ト</sup>三歳成子<sup>ニ</sup>持<sup>タリ</sup>。無<sup>シテ</sup>食物<sup>ニ</sup>飢臨<sup>ム</sup>也。故父子二人スゴシカネテ我子<sup>ヲ</sup>連行<sup>キ</sup>仁和寺橋下捨<sup>テ</sup>、我父計養<sup>ヲ</sup>也。而此女房子捨時一尺四寸卒塔婆<sup>ヲ</sup>作<sup>リ</sup>、是歌書子添捨<sup>ニ</sup>。其歌云、

子捨<sup>ル</sup>形見<sup>ノ</sup>卒塔婆<sup>イ</sup>カハカリサラテハ何親助<sup>ニ</sup>矣<sup>ハ</sup>  
山法師此子捨<sup>テ</sup>我在所連行<sup>メ</sup>ノトヲ取ソタツルニ、後  
三塔一学匠<sup>ニ</sup>成<sup>リ</sup>、乗仙僧都<sup>ト</sup>天下無<sup>ク</sup>隠人<sup>ト</sup>成也。

其後此僧都為<sup>レ</sup>尋<sup>ル</sup>母、若又此世過<sup>テ</sup>後生<sup>ニ</sup>菩提<sup>ヲ</sup>為<sup>ル</sup>、於<sup>ニ</sup>坂本<sup>ニ</sup>百日談義<sup>ヲ</sup>、同施行<sup>ヲ</sup>被<sup>レ</sup>引也。左手母捨<sup>テ</sup>時添捨<sup>テ</sup>卒塔婆<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>右手料<sup>ヲ</sup>足以施行<sup>ヲ</sup>引、六十日七十日過<sup>テ</sup>、母不<sup>レ</sup>尋<sup>ル</sup>合一。其時僧都卒塔婆<sup>ヲ</sup>歌末書替<sup>テ</sup>。

子捨<sup>ル</sup>形見<sup>ノ</sup>卒塔婆<sup>イ</sup>カ計去<sup>リ</sup>何親尋<sup>ル</sup>

其後多非人<sup>ノ</sup>中老女有<sup>リ</sup>、此卒塔婆<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>涙<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ト流<sup>ス</sup>也。僧都此由見<sup>テ</sup>玉密<sup>ニ</sup>人遣<sup>テ</sup>呼寄<sup>シ</sup>、我子也、我母也互名乗給也。其後草庵<sup>ニ</sup>結<sup>テ</sup>母置<sup>テ</sup>朝夕養育<sup>ス</sup>也。依<sup>テ</sup>子教化<sup>ス</sup>一心不<sup>レ</sup>乱<sup>ル</sup>後生<sup>ニ</sup>願<sup>フ</sup>、母諸共往生<sup>ス</sup>遂<sup>ニ</sup>子程<sup>ノ</sup>宝無<sup>レ</sup>之。在家人最祈誓<sup>シ</sup>子可<sup>レ</sup>持事也。是即淫欲<sup>ノ</sup>方取寄<sup>テ</sup>終<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>仏道也。

〔《法華經直談鈔》卷十本、普門品第卅五「捨子養父之事」<sup>注6</sup>〕

仁和寺の橋下に捨てられた嬰兒は叡山の法師の拾い養うところとなり、三塔一の学匠に育つて乗仙僧都と名乗る。乗仙は母恋しさのあまりに江州坂本に出て百日間の施行を引く。子別れに当って母親が授けた「子を捨つる形見の卒塔婆いかりさらでは何とおやをたすけん」という和歌を記した卒塔婆を手に辻立ちしてみたが、六十日七十日が経

過しても母と名乗り出る者はなかった。それゆえ和歌の末句を少し代えてみたところ、集まった貧人の中に涙を流す老女がいた。やがて親子の名乗りをはたし、母は乗仙の教化を受けて修行に励み、親子ともども極樂往生の素懷を遂げたのであった。

第二話の尊弁説話は《図版》の部分が『法華經直談鈔』にそっくりであった。加えてそのあらずしもまた《解説》の記事と矛盾する箇所を見出さない。第一話も類話と指摘した『法華經直談鈔』の話と《解説》の記事とは齟齬せず、図版の開示もなく確証を欠く憾みは残るものの、第二話同様の重なりを文言の細部にわたって呈するものと考えても大過なからう。

つまり『玉てはこ物語』は『法華經直談鈔』に載るあまたの例話から捨て子の説話二つを抜き、流麗な仮名交じり文に書き直したものと結論に到達することになったのであるが、ことここに至っても一抹のためらいがあつて断定を妨げる。

### 三『玉てはこ物語』と『ひそめ草』

ためらいはおそらく直談という経論註解の方法に発するものであらう。『法華經直談鈔』『法華經鸞林拾葉鈔』の二

書は直談物と呼ばれる天台宗系の注釈書である。直談とは、経論を解釈するにあたって譬喩を積極的に利用し、論理の積み重ねによる説明よりはむしろ卑近な事象の類推をもって達意を計ろうとする講釈のことであり、譬喩としては、ことわざ・名歌のほかに説話・逸話などが用いられる。これを譬喩の側から言えば、例話はそれぞれ經典の特定の箇所ないしは文言を代弁するものであり、法華經の经文と一対一の対応をする。たとえば『玉てはこ物語』の二話についていえば、第一話の乗仙僧都の説話は普門品の、

若有女人 設欲求男 礼拝供養 觀世音菩薩 便生福德智慧之男（若し女人ありて、設し男を求めんと欲して、觀世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德・智慧の男を生まん）<sup>注7</sup>。

という经文のうちの「福德智慧之男」（索引 七六a二三）を説明する《直談》である。ただし譬喩としての例話と经文との対応がいささか分かりにくい。分かりにくい理由は普門品の右の引用の直前に、

若有衆生多於淫欲。常念恭敬觀世音菩薩。便得離欲（若し衆生ありて淫欲多からんに、常に念じて觀世音



菩薩を恭敬せば、便ち欲を離るることを得ん。

という経文（**索引** 七六 a 一四―一六）があつて、淫欲の払拭に観音が与つて力あることをいい、淫欲を遠ざけようとする思いと女人が男児を産みたいと思うことは矛盾するのではないかという、当然の疑念に対する反論をも含めて、説明が以下のような屈曲した論理をたどることにある。すなわち、観音は衆生のあらゆる願を叶え給う菩薩である、それゆゑ淫欲を絶つ願とともに、淫欲を願う願をも聞きとどけるにやぶさかでない、淫欲の結果として子が生まれ、子への愛着が機縁となり仏道に至つた乗仙僧都の母の例もあるではないか、煩惱即菩提、淫欲も仏道に入る機縁として機能することがあるのだ――と。『法華経直談鈔』からの先の引用の末に添えられた「是即淫欲方取寄終入三仏道也」という評言もそんな意味に理解することができ。

例話と経文との対応は第二話の場合、分りやすい。第二話の尊弁僧正を主人公とする例話は、薬王品の「如子得母」（**索引** 七二 d 一六）という経文の《直談》である。「如子得母」とは薬王品にいう「値法華経十一譬」（法華経に出合うことのできた喜びを譬える十一の譬え）の第五譬であつて、子が実母を探し求めて再会をはたした喜びの意

味、逢いがたき法華経に出合えた感激を捨て子が実母を探し当てた喜びに譬えるのであるから、尊弁僧正が生みの母に再会する一話はそのまま「如子得母」という経文の《直談》として、素直に納得できる。

くりかえしになるが、例話は経文を説明・理解するための譬喩として存在し、経文に隸従する。第一話の乗仙と第二話の尊弁とは親に捨てられながらも高僧となり、形見を手がかりに母親との再会を果すことで共通するが、直談の世界にあつてこの括りかたはありえない。第一話は普門品にいう観音力の称賛を《直談》し、第二話は薬王品にいう法華経そのものの礼賛を《直談》するものであつて範疇を違えるところから、同類として一束ねに束ねられることなど考えにくいのである。『玉てはこ物語』に見られるのは『法華経直談鈔』が直談物であるゆえんの《直談》という特性をそぎ落としたうえでの『法華経直談鈔』の活用であり、言葉を換えれば、『法華経直談鈔』の宗教性を払拭した利用である。宗教性を払拭した宗教書の利用、それは天台談義所と距離を置いた者の発想であらう。『玉てはこ物語』は細部にわたって文言を『法華経直談鈔』と重ねあわせるものであつたが、その間には思いのほかの逕庭が存在する。両書が結びつくためには飛び石が必要であつたものと考えるべきであらう。

そして飛び石の役を果たしたと思われる存在をここに名指しすることができる。仮名草子『ひそめ草』（正保二板）の中巻第四話がそれであつて、次のような行文をたどる。

○人のいへるをきけは、むかし都の辺にやもの女房一人有。七十になる父と三歳になる子を持たり。食物なくして飢に望むゆへ、父と子の二人をすごしかねて我子をはつれて行、仁和寺の橋の下に捨て、我父計をやしなふなり。しかるに此女房かの子を捨る時、一尺四寸に卒塔婆を作りこれにうたをかき、子にそへてすてたり。其うたに、

子をすつるかたみのそとばいかばかりさらでは何と親をたすけん

と書付たり。山法師此子を捨て我在所へつれ行、めのとをとりそだつるに、後には三塔一の学匠に成、乗仙僧都とて天下にかくれなき人と成也。其後に此僧都は、をたづねんとす。もし又此世を過たまは、後生菩提のためとて、坂本におゐて百日談儀（マツマ）をし同しく施行をひかれける。左の手に母のすてし時そへてすてたるそとは持て右の手には料足をもつて施行をひくに、六十日七十日過れども母にたづねあはず。其時僧都そばのうたのすへをかきかへたり。

子をすつるかたみのそとばいかばかりさらではなにと親をたつねん

其後おほき非人の中に老女のありしか、此そとばをみて涙をはら／＼とながす。僧都此よしを見給ひてひそかに人をつかはしてよびよせ、我は子也、我は母なりと互に名乗あひ給ふ也。其後草庵をむすび母を置いてあさゆふ養育し給ふ也。子の教化によつて一心不乱に後生をねがひ、母もろ共に往生をとげ給へり。

さらにこの先、改行することもなく、次の一話が連続する。

又むかし、賀茂の神主子なき事を歎て明神にきせす。或時めしつかふ女房達の中に侍従といふ女房にちぎりけるに、程なく懷妊して男子を一人うめり。亭主の女房大にはら▼をたて、此子はやく捨へし。しからずは親子ともにくろすべしとていかりたり。力をよばず此子をすつる。推古天皇の御時（コガナ）金にて菊の紋をすへたる御手箱を明神に御寄進あり。此子を練貫の絹につゝみかの手箱のかけごに入て賀茂川の辺に捨てたり。宝応元年八月の事なるに、土御門の大納言と云人賀茂の明神に通夜して曉下向あるに、河原にちいさきもの、鳴声しければ、人をつかはして見せられけり。か

へりてしかく申たり。此子めしよせ自<sup>みづか</sup>懷に入て家にかへりこれを養育せらるゝに利根なる事世にすぐれたり。しかれば山門にのぼ▲せて出家させらるゝに、学問人にすぐれほどなく貴僧と成、名は尊弁僧正と申也。卅三の時嵯峨の釈迦堂にて説法あり。さてかの母の侍従公は子をしてたる事を歎きて頓て出家し比丘尼になり諸国をまはり靈仏にまふで、捨たる子の後世をもとふらひ我身の後生をも祈りけるに、卅三年といふ時、はややうく老身となれば古郷の恋しさに、都をさしてのぼらるゝ所に、折節嵯峨にこそ貴人の御説法ありとて貴賤上下まいるを見て、さらばまいらんと思ひ嵯峨へぞ参られけり。釈迦堂へ参、説法をちやうもんあるに、殊勝さ中く申もおろか也。又彼御僧をつくく〳〵と見るに、何とやらん我らか古の妻の面かけに似たれば床しくて、諸人は皆下向あれども此比丘尼一人は僧正にたづね申度事有ととまり、諸人かへり畢て後に僧正のまへに参り申さるゝやうは、そつじなれどもふしんに存る事あるゆへにたづね申也。さても僧正の御里はいづくぞ、又いかなる人の御子にてましますぞととひたまふ。僧正の仰には我に父母なし、すて子なりといひて件のごとくかたり給ふ。比びくにはこれを聞て猶々ふしんに思ひ、あはれ〳〵其手箱のかけ

ごを御みせあれと所望す。僧正は手箱のかけこを取よせて彼比丘尼にみせられけり。びくには此かけごをもちて急ぎ賀茂に行、古の我妻に尋合て此よしを語けり。其時神主やがてかの手箱を取合てみるに少もちがはす。其時父母子諸共に我こそ誠の母なれ父なれ子なれと名乗あひたり。其時の歌に、

玉手箱中<sup>に</sup>かけごのなかりせばふたみにそへて何かあふべき

とありし也。去程に子程の宝はこれなし、た、人はいかやうにも子をねがふべき事也。子なき人は行末便なき事也。

翻字に当り、煩を嫌つて振りがなを大幅に省いた。また『ひそめ草』は中巻に限つて句読点を施さないので、適宜これを補つた。

右の引用に▼と▲を使つて『玉てはこ物語』の《図版》に相当する部分を囲つてみた。この部分と『法華經直談鈔』『ひそめ草』の本文を較べてみることにする。比較は《図版》に即して一行ごとに分けて行うが、まず『玉てはこ物語』の本文を掲げ、『ひそめ草』『法華經直談鈔』は行頭を字下げして併置する。

1 をたて、此子はやくすつへししからす

をたて、此子はやく捨へし。しからず

立、此子早可捨。不<sub>レ</sub>然

2 はおやこともにころすへしとて

は親子ともにころすべしとて

者親子共可<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>云<sub>テ</sub>

3 いかりたりちからをよはす此子を

いかりたり。力をよばず此子を

嗔<sub>タリ</sub>。不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>力此子<sub>ヲ</sub>

4 すつるすいこ天皇の御時こかねに

すつる。推古天皇の御時金に

捨也。而推古天王御時金<sub>ニ</sub>テ

5 てきくのもんをすへたるおんてはこ

て菊の紋をすへたる御手箱

菊文<sub>ヲ</sub>スエタル御手箱<sub>ヲ</sub>

6 を明神に御きしんあり此子をね

を明神に御寄進あり。此子を練

明神<sub>ニ</sub>御寄進<sub>アリ</sub>。此子<sub>ヲ</sub>練

7 りぬきのきぬにつゝみかのはこの

貫の絹につゝみかの手箱の

貫絹<sub>ニ</sub>褰<sub>テ</sub>彼手箱<sub>ヲ</sub>

8 かけこに入てかも川のへんにすてたり

かけこに入て賀茂川の辺に捨たり。

懸子<sub>ニ</sub>入<sub>テ</sub>、賀茂河<sub>ノ</sub>辺<sub>ニ</sub>捨<sub>タリ</sub>。

1 ほうおうくはんねん八月のことなるに

宝応元年八月の事なるに、

宝応元年八月事<sub>ナルニ</sub>、

2 つちみかとの大なこんといふ人かもの

土御門の大納言と云人賀茂の

土御門大納言<sub>ト</sub>云人賀茂<sub>ヲ</sub>

3 明神につやしてあかつきけかふあ

明神に通夜して暁下向あ

明神<sub>ニ</sub>通夜<sub>シテ</sub>、暁下向<sub>ヲ</sub>

4 るにかわらにちいさきものゝなくこゑ  
るに、河原にいちいさきものゝ、鳴声  
有、河原少者鳴声ルニノハクシクレハ

5 しければ人をつかはしてみせられ  
しければ、人をつかはして見せられ  
遣人被見也。シテヲ

6 けりかへりてしかくと申たり此子  
けり。かへりてしかくと申たり。此子  
帰然然申。此子テトタリ

7 めしよせみつからふところにいれて  
めしよせ自懷に入て  
召寄自懷入ヲニテ

8 いへにかへりしかればさんもんにのほ  
家にかへり「これを養育せらるゝに利根なる事  
世にすぐれたり。」しかれば山門にのほ  
家婦「是養育ニ利根セラルニ事世勝ナルニタリ」然登ハセテ山門ニ

比較の結果として言うべきは、三者の本文が見せる意外

なまでの近似である。漢文とその書き下しという程度の違  
いと呼んでも極論にはならないであろう。つまりほとんど  
違いがない。しかし、しいて指摘するならば、《図版》見  
開き二ページのうち、第一ページ2行目・同4行目、第二  
ページ5行目に見出した小異三例を挙げるができる。  
当該三例は『法華経直談鈔』をメインに改変して示すとき、  
違いが鮮明になる。

#### I 親子共可害レ之云ニテ

親子ともにころすべしとて（ひそめ草）

おやこともにころすへしとて（玉てはこ物語）

#### II 不レ及レ力此子捨也。而推古天王御時

力をよばず此子をすつる。推古天皇の御時（ひそ  
め草）

ちからおよはす此子をすつるすいこ天皇の御時  
（玉てはこ物語）

#### III 遣人被見也。帰然然申。トタリ

人をつかはして見せられけり。かへりてしかくと  
申たり（ひそめ草）。

人をつかはしてみせられけりかへりてしかくと

申たり（玉てはこ物語）

違いは三例いずれも仮名交じり文には馴染みそうにない漢文体特有の生硬な表現の言い換えにもとづくもののようである。とくに〔Ⅲ〕の「被<sub>レ</sub>見也」は「見セラルルナリ」とでも読ませるつもりなのであるが、漢文体としても落ち着かない。ちなみに『法華經直談鈔』の古写本のうち著者自筆本とされる金台院本では、この箇所を「遣<sub>ニ</sub>人<sub>一</sub>被<sub>ニ</sub>見<sub>一</sub>之、帰<sub>テ</sub>シカ<sub>ノ</sub>ト申<sub>タリ</sub>」<sup>注8</sup>とし、舌頭に滞るようなことはない。

ここで着目すべきは、異文の箇所において、『法華經直談鈔』対『ひそめ草』『玉てはこ物語』という二項に対立する点であろう。『ひそめ草』と『玉てはこ物語』との間には三例とも漢字・仮名の表記の違いをはみ出す本文の相違はみられない。これは欠文のあった最終行を別にすれば、『図版』のどこにも本文の相違がなかったことを意味する。そしてこのことは、さらに『ひそめ草』『玉てはこ物語』の両書が『法華經直談鈔』とそれぞれ個別に接触を持ったものではなかったことを示唆する。個別に接触した結果であつたならば、両書のこれほど完璧な一致はありえない。

これは『ひそめ草』と『玉てはこ物語』とは、どちらかがどちらかを座右に置いて利用したという関係にあること

を意味する。そして《図版》最終行に見出した欠文を根拠に、利用は『ひそめ草』から『玉てはこ物語』へという流れであつてその反対はありえない、とせねばならない。

また、脱文のあつた最終行は「いへにかへり※しかれはさんもんにのほ」という行文であつたが、正保二年板の『ひそめ草』によつて当該箇所の版面を行替えもそのまま再現すれば次のようになる。

此子めしよせ自懷に入て家にかへりこれを養育せらるゝに利根なる事世にすぐれたりしかれば山門にのほせて出家させらるゝに……

ここから二つの事象が看取できる。脱文の長さが正保二年板の一行分であることと、※印に相当する脱文の前と後に「家にかへり」「世にすぐれたり」と「り」という文字があつてほぼ横並びに並ぶことである。この先は多言を必要としないであろう。脱文は正保二年板の版面に隣りあう二つの「り」の間に生じた《目移り》のもたらしたものであつた。<sup>注9</sup>

ここに、新出資料の『玉てはこ物語』は『ひそめ草』巻中第四話の忠実な写しであつたと結論づけられるもののがうである。この結論を『ひそめ草』という作品そのものが

支持する。『ひそめ草』には右に述べたとき《直談》色を拭い去ったうえでの『法華經直談鈔』の利用例として、中巻第四話の乗仙・尊弁捨子譚以外に十七話を確認すること<sup>注10</sup>ができる。

《図版》にかいま見たわずかに二ページ分をもとに全体を推しはかるのは大胆に過ぎるかもしれない。しかし、この結論を、冒頭に引用した古書目録の《解説》も間接的ながら支持する。《解説》の最終段落に、同じく新出の『あかはだか物語』に関して言及があった。『あかはだか物語』は装訂・寸法・各半丁行数などを同じくし、本文同筆、しかも和学講談所の旧蔵ということでも『玉てはこ物語』と共通するという。『あかはだか物語』も古書目録に「五四あかはだか物語 江戸期写 一帙一冊」として『玉てはこ物語』同等のスペースを割いて載るが、その解説に仮名草子『為愚痴物語』（寛文二板）の巻八「生れおつる時は無念無想なる事」の一話をほぼマル写ししたものであったことが明かされている。

つまり古書目録に並ぶ「五四」「五五」の二書を一双に配するとき、中本、本文同筆、和学講談所旧蔵という書誌条項の一致に加えて、『為愚痴物語』の一話を内容とする『あかはだか物語』に配するに『ひそめ草』の一話を写した『玉てはこ物語』という構図が鮮明になる。『あかはだ

か物語』と『玉てはこ物語』とは、当時の新刊書からお気に入りの一話を抜取るシリーズのような構想があり、それぞれその一冊だったのかもしれない。

注1 臨川書店「和洋古書善本特選目録夏期特集号」十九（平成二・七）。

2 永井義憲氏『法華經鷲林拾葉鈔』（平成三 臨川書店）第四冊二三七～二四〇ページ。底本は慶安三年林甚右衛門板。

3 索引 という略号を冠して法華經内の所在を示してみた。索引とは東洋哲学研究所編『法華經一字索引』（一九七七 同研究所）のことであり、「七二d一六」とは同書七二ページ第四段一六行目を意味する。

4 注2の五五四ページ。  
5 池山一切園氏『法華經直談鈔』（昭和五四 臨川書店）第三冊三五八～三六一ページ。底本は寛永十二年西村又左衛門板。

6 注5の四二三～四二四ページ。  
7 坂本幸雄・岩本裕氏『法華經』（一九七六 岩波文庫）によって読み下しを添えてみた。

8 『法華直談抄』（『法華經直談鈔 古写本集成』四）一 二二〇ページ。

「同じような文言が少し先の行にもあった場合、そちらを見てしまい（目移りといいます）そこまでの部分を飛ばしてしまうこともあります」（堀川貴司氏『書誌学入門』二〇一〇 勉誠出版、一一三ページ）。

拙稿『『ひそめ草』考——中世説話との関連を中心に——』（『仮名草子の基底』昭六一 勉誠社）。

（わたなべ もりくに・実践女子大学名誉教授）